

第2回サステナブルデザイン国際会議

Destination 20²⁵

デスティネーション2007-2025

The 2nd International Conference of Design for Sustainability

報告書



*Drawing a land map of
a sustainable society.*

2008年7月

サステナブルデザイン国際会議実行委員会

はじめに

京都議定書以来 10 年、日本は産・官・学が総力を挙げてエコデザインによるエコプロダクトの開発に取り組み、目覚ましい成果を上げてきた。それにもかかわらず、この国の CO₂ 排出量は増えるばかり。サステナブルな社会の構築は私達に課せられた課題である。この会議では世界中の見識が集結し、現在のライフスタイルを含めた多くの活動や価値観を根底から見直すとともに、「サステナブルな社会の実現に向けたロードマップを描き、人にも自然にも過剰なストレスをかけずに長く続けてゆくことのできるサステナブルな社会を作る」という最終目的に立ち返り、デザインの役割を再考し、体制を立て直すことを意図している。

2006 年 12 月に開催した第 1 回の本会議ではエコプロダクトやエコデザインを比較しつつ、サステナブルデザインのアウトラインを描くという目的で、エコプロダクト展の開催と併せて東京ビッグサイトにて開催したが、今回の第 2 回は、集中して議論を深めることを目的とし、もう少し落ち着ける場所が必要だと考え、トヨタ白川郷自然学校に会場としてご協力頂いた。トヨタ白川郷自然学校は、合掌造りの集落で有名な世界文化遺産「白川郷」にある。東海どころかほとんど北陸で、冬は雪深い場所である。200 年以上変わらぬ姿を保ってきた雪の白川郷にて、サステナブルな未来に思いを馳せた。

2008 年
サステナブルデザイン国際会議実行委員長
益田文和

もくじ

- 02... はじめに
- 03... 開催趣旨
- 04... 開催概要
- 05... プログラム
- 06... 地球環境の現状認識：基調講演
「気候変動とイノベーション」
山本良一
[組織委員長 東京大学生産技術研究所教授]
- 08... ローカルな課題認識：特別講演
「白山麓の自然と文化」
谷口尚 [岐阜県 白川村長]
- 09... オープンフォーラム：
「PEACE NEEDS A NEW LOGO」
黒崎輝男 [流石創造集団代表取締役]
- 10... 世界の活動報告・1
「A Report from O₂ global Network」
アーネスト・ヤン・ヴァン・ハッタム [O₂ GN 代表]
- 11... 世界の活動報告・2
「デザインによる地域資源の活用」
シンギー・カルトノ [piranti works 代表]
- 12... ワークショップ
- 14... ワークショップ A
「サステナブルな暮らしを描く」 報告
- 16... ワークショップ B
「サステナブルな社会を描く」 報告
- 18... 国際若手デザイナーワークショップ中間報告
- 20... クロージング・ミーティング
- 22... オプションイベント
- 23... 参加者名簿





会議初日 12月21日の受付風景

開催趣旨

好転しない地球環境条件

日本をはじめとする工業先進国においては、1990年代以降、環境適応技術開発及び製品開発分野における進展は目覚しいものがあります。しかし、それにもかかわらず天然資源の消費傾向、CO₂の排出量、地球温暖化など、どの指標をとっても地球レベルでのサステナビリティが好転する兆しは見えてきません。それどころか世界中の科学者による未来予測はますます悲観的になってきています。

サステナブルな社会のイメージを描く

この状況を打破するためには、従来からの工業技術、産業経済、社会制度の枠組みの中で語られてきたサステナビリティに関する議論を再構築する必要があります。まずは、われわれの目指すサステナブルな未来の社会とはどのようなものか、その姿を可能な限り具体的なイメージとして描き出す作業を始めなければなりません。目的地のないロードマップは作りようがないのです。

サステナブルデザインの必要性

そのためにデザイン専門領域が持つ構想力や表現力といった潜在能力を最大限に発動するサステナブルデザインの必要性を確認し、あらゆる関連専門分野との連携を呼びかけるためにサステナブルデザイン国際会議の開催を提唱します。



*Drawing a land map of
a sustainable society.*

第2回サステナブルデザイン国際会議

Destination 2007

デスティネーション 2007-2025

The 2nd International Conference of Design for Sustainability

開催概要

- 名 称： 第2回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2007-2025
- 会 期： 2007年12月21日（金）～23日（日）
- 会 場： トヨタ白川郷自然学校（岐阜県大野郡白川村馬狩223） www.toyota.eco-inst.jp
- 主 催： サステナブルデザイン国際会議実行委員会
- 共 催： エコ・エフィシエンシーとエコデザインに関する特別研究会（SPEEED研究会） www.speeed.org
国際ユニヴァーサルデザイン協議会（IAUD） www.iaud.net
国際若手デザイナーワークショップ開催委員会〔名古屋市、（株）国際デザインセンター〕 www.idcn.jp/workshop
- 後 援： 経済産業省、環境省、大阪府、社団法人産業環境管理協会、社団法人日本グラフィックデザイナー協会、社団法人日本インダストリアルデザイナー協会、社団法人日本ディスプレイデザイン協会、社団法人日本パッケージデザイン協会、財団法人国際デザイン交流協会、財団法人日本産業デザイン振興会、エコ産業創出協議会、日本デザイン機構、おおさかATCグリーンエコプラザ実行委員会、ネイチャーテック研究会、ユニバーサルデザインフォーラム、ユニバーサルデザイン・コンソーシアム、日本経済新聞社、東京大学生産技術研究所、東京造形大学、NPOエコデザイン推進機構、NPOエコデザインネットワーク、o2 Global Network foundation、o2 Japan
- 協 賛： 株式会社INAX、エプソン販売株式会社、セイコーホームズ株式会社、株式会社地球の芽、株式会社東京デザインセンター、株式会社東芝、トヨタ自動車株式会社、富士通株式会社、日本デザインコンサルタント協会、Indonesia-Japan Friendship Association、Paperina Dwijaya
- 協 力： トヨタ白川郷自然学校、株式会社JTB 法人東京
- 事務局： サステナブルデザイン国際会議事務局〔有限責任事業組合エコデザイン研究所内〕
(東京都港区浜松町1-22-8 / Tel. 03-3578-1458) www.ecodesigninstitute.com

実行委員長 益田文和





参加者ネームプレート

プログラム

本会議は、全体会議とワークショップにて構成された。

■ 1日目： 13:30

13:35

全体会議

開会挨拶

益田文和

[実行委員長 東京造形大学デザイン学科教授]

地球環境の現状認識：基調講演「気候変動とイノベーション」

山本良一

[組織委員長 東京大学生産技術研究所教授]

ローカルな課題認識：特別講演「白山麓の自然と文化」

谷口 尚

[岐阜県 白川村長]

オープンフォーラム：「PEACE NEEDS A NEW LOGO」

黒崎輝男

[流石創造集団代表取締役]

世界の活動報告・1：「A Report from O2 globalNetwork」

Ernst-jan van Hattum

[o2 Global Network 代表]

ワークショップ・オリエンテーション

■ 2日目： 08:30

世界の活動報告・2：「デザインによる地域資源の活用」

Singgih S. Kartono [piranti works 代表]

09:45-19:00

ワークショップ

■ 3日目： 08:30

ワークショップ A 「サステナブルな暮らしを描く」 報告

ワークショップ B 「サステナブルな社会を描く」 報告

国際若手デザイナーワークショップ中間報告

クロージング・ミーティング

全体会議

サステナブルデザイン分野で国際的に活動する研究者や
デザイナーによる講演



地球環境の現状認識：基調講演 「気候変動とイノベーション」

山本良一 [サステナブルデザイン国際会議組織委員長／東京大学東京大学生産技術研究所教授、SPEED 研究会代表幹事]

地獄からの脱出には、 デザイナーや建築家の力が必要

科学者は、地球温暖化地獄がはじまるのはあと五十年から百年後と考えていた。しかし、その予測はまったく外れており、既に私たちは地獄の一丁目※に入っている。その地獄からどうやって脱出するのか。脱出には、デザイナーや建築家の力が必要だと考えている。

世界は現在、人口や GDP、CO₂ 排出量が増加する一方、生物は大量絶滅しています。一日で世界人口が二十万人増える一方、その他の生物種はおよそ百種絶滅しています。なぜ CO₂ が問題か。人間の 1 年間に排出する CO₂、264 億トンのうち、60% の 152 億トンは吸収されずに空気中に残ります。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）のレポートによると排出量の約 20% は数千年間大気中を漂うといいます。すなわち私たちが今炭酸ガスを放出すると、二千年から三千年先の地球的責任を自覚しなければならないということです。例え直ちに CO₂ 排出量を 100% 削減しても、CO₂ は既に空気中に沢山あるため百年経っても元に戻りませんし、さらに気候システムの熱的慣性から、数十年間は温暖化は進んでいきます。さらに深刻なのは 1°C 地球の表面温度が上昇すると、海や陸地から四千億トンの炭酸ガスが空気中に放出されるということです。人類はこの先数世紀、この温暖化の問題と戦っていくことになります。

既に気温上昇が加速していることは明らかです。現在の世界の表面温度は産業革命以前に比べて、既に 0.8°C 上がっ

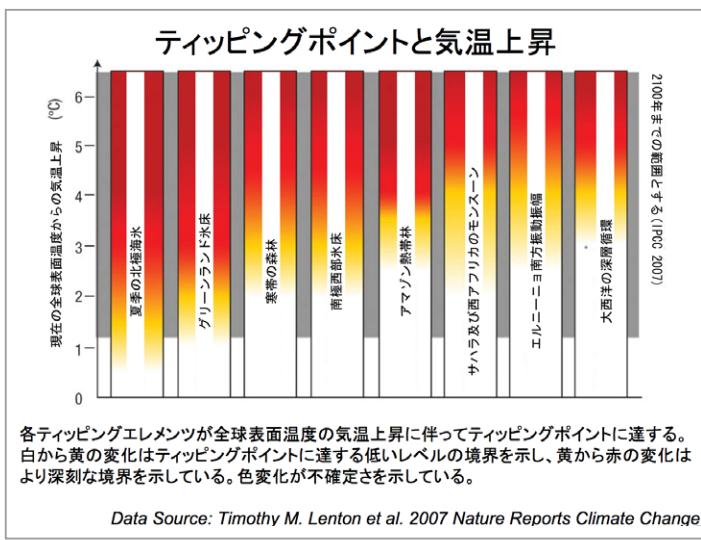
ています。日本の科学者の研究によると 2028 年までに 2°C 気温は上昇し、3°C 上がるのは 2052 年と計算されています。あと 20 年で 2°C を突破してしまう可能性が高いのです。2°C を突破するころには温暖化が更なる温暖化を引き起こす「温暖化の暴走」が始まると予想されています。

現実に起こっている地獄

日本では昔から仏教の教えとして、「悪いことをすると地獄に落ちる、報いを受ける」と教えられてきました。現在の地球環境問題を見ると、もう既にその地獄が現れています。オーストラリアの干ばつ、バングラデシュやインドでは三千人が大洪水の被害を受け、カリフォルニアや地中海沿岸では森林火災、そして、世界中で約三千人が食料危機に陥っています。既に環境難民が発生しています。私たちが見ている前で、巨大な変化が地球環境に起きています。アマゾンの熱帯雨林はこのまま破壊が進むと 2030 年までに 60% が消滅し、北極海氷は夏期は完全に消滅してしまうという大変な事態になります。北極海氷がなくなるとアメリカのロッキー山脈から西側は大干ばつに陥り、日本も無傷ではいられません。既に北極海氷は臨界点を超え、次はグリーンランド氷床の全面融解の開始と言われています。シベリアやアラスカの森林やアマゾンの熱帯雨林が枯れ、サバンナあるいは砂漠になり、西南極大陸が崩壊する。おそらくこのまま私たちが温暖化を放置すれば、温暖化が加速し 2050 年くらいまでに地獄の五丁目に行くのではないかというのが最新の科学者の考え方です。



※左から地獄の一丁目、二丁目と、気温の上昇にともない起こると予測される地球環境の変化を表している。



環境問題はデザイナーの責任

これらはデザイナー、建築家の責任が極めて大きい。エネルギーを大量に消費し、使い捨ての製品を作る。そういうことをするから私たちの文明の環境に対する影響が増大し、世界を破壊しつつあるのです。デザイナーや建築家がそこを認識を改めることが非常に重要です。

ではどうやって問題を解決するか。温室効果ガス削減に全力を挙げて取り組まねばなりません。全世界で2050年までに50%以下に削減する必要があります。特に日本や先進国は80~90%削減せねばなりません。IEA(国際エネルギー機関)が作っている「 $2^{\circ}\text{C}/450\text{ppm}$ シナリオ」では、あらゆる技術開発をし、再生可能エネルギーを最大限導入し、全知全能をあげて取り組めば、このシナリオは実現できるとしています。

講演者プロフィール

山本良一 (やまとりょういち)

東京大学生産技術研究所教授。工学博士。文部科学省科学官、エコマテリアル研究会名誉会長、日本LCA(ライフサイクルアセスメント)学会会長、グリーン購入ネットワーク名誉代表など、多くの要職を兼務。「1秒の世界」「気候変動+2°C」他責任編集。SPEED研究会代表幹事。

※2 エコプロダクツ展：1999年以来、毎年12月に東京ビッグサイトで開催されている環境配慮型製品(エコプロダクツ)やサービスに関する展示会。2007年は12月13~15日の3日間開催。環境系展示会としては、国内最大規模の展示会である。産業環境管理協会、日本経済新聞社が主催。

地球温暖化に宣戦布告せよ

これをやるか、やらないかは、まさに社会のあらゆる製品をデザインする人がかかっています。材料、デバイス、製品、建築、インフラ、ありとあらゆるもの環境に配慮した、社会と人に配慮した設計していくという「イノベーション」が求められています。あらゆるものを作らなければなりません。

デザイナー、研究者、企業、消費者の4者の協力が必要である

本会議1週間前に開催したエコプロダクツ展では632社が出展、3日間で16万5千人が来場し、9年間で最大の展示会となりました。最終日には、福田首相をご案内しました。

私は特に今年、人類は認識を一変させたと考えます。破局が目の前で起こっているからです。だから私たちは全力を挙げて、この問題に立ち向かわなければなりません。それにはデザイナーや建築家、LCAエンジニア、企業のマネージャー、グリーンコンシューマーが連携するしかありません。デザイナーの皆さん、そしてデザイナーの卵の皆さんには新しい環境文化、環境ファッショント、環境流行を作り出していくことができます。ぜひがんばっていただきたい。

これが私の今日のメッセージです。

口一カルな課題認識：特別講演 「白山麓の自然と文化」

谷口 尚 [岐阜県 白川村長]



講演者プロフィール

谷口 尚 (たにぐちたかし)

1943年白川村生まれ。日本大学獣医学科卒業後、岐阜県職員、白川村農務課長、建設課長等を経て、1991年白川村教育委員会教育長に就き白川郷合掌造り集落の保存、世界遺産登録に力を注ぐ。1999年4月より白川村長に就任。



温暖化の影響を受ける白川郷

白川村のある白山連峰は日本のちょうど真ん中にあり、新潟県や長野県に次ぐ豪雪地域です。昭和56年の豪雪の際には21m以上も降雪があり、特に本日の会場、トヨタ白川郷自然学校がある場所は高台にあるため雪が多く、電柱が埋まって見えなくなった程の雪でした。白山は高山植物や薬草が豊富に繁茂しており、麓はブナ林で、秋の紅葉、冬景色が大変美しいところです。しかし、近年は温暖化の影響か、例年12月には降っていた雪が降らなくなり、また、3月はほとんど降らなかった雪が4月の頭にかけて降るようになり、季節ずれたような気がいたします。

伝統を継承しながら共生思想を 育み暮らす合掌集落

白川村のような山の中というのはお互いに助け合いながら暮らしています。例えば田植えも時は人のところへ手伝いに行き、手伝いにも来てもらいます。大人数でやると仕事の効率が非常に良いのです。また、合掌造り※の屋根の葺き替えも、皆の力を借ります。材料の茅も貸し借りをします。白川村では、そのような協力をする暮らしを次の世代にも継承してもらおうと、子供たちにも色々な形で教育をしています。白川村の名物である「どぶろく祭り」、田んぼの耕作、あるいは合掌造りの屋根の葺き替えにも、子供たちを参加させています。



(講演資料より抜粋)

※合掌造り：角度が急な茅葺（かやぶき）の屋根が特徴の住宅建築様式。屋根の形が合掌した時の手の形に似ているところから、「合掌造り」と言われるようになったと言われる。本来は日本の民家に広く見られた構造であるが、特に白川郷や五箇山が有名であり、白川郷、五箇山の集落に残存する建築群は、ユネスコの世界遺産に登録されている。

茅葺きの屋根は、雨仕舞いのために急傾斜の屋根にする必要があり、また、豪雪地帯では特に積雪時の屋根荷重を支えるにも都合よく、雪下ろしが行いやすい角度になっているという。また白川郷では屋根は南北に向かって建っており、雪が丁度よく東側と西側で消えるようになっている。風にも強く、傾いても元に戻るという。

合掌造りの建物はその地域の山の木や茅を用い、その地域に住む住民の知恵によってできた建物である。金具はひとつもされていない。

今この建物は、日本の建築基準法からいうと建てられないという。

白川村は以前は冬には観光客がひとりも来ない村でした。しかし最近は、雪が合掌造りの風景に非常に合うということで観光客が増え、年間150万人の人が訪れるようになりました。近年は外国からのお客様も急激に増えています。JICA（国際協力機構）では最近よく白川村にアジアの関係者を連れてまいります。古いものをしっかりと守り、継承して保存していくことが、観光に結びつくということで、その模範例として紹介頂いております。

私たちは先祖から受け継がれてきた白川郷のこの文化を地域の皆と一緒にになって、将来も守り続けていきたいと思っております。

オープンフォーラム： 「PEACE NEEDS A NEW LOGO」

黒崎輝男 [流石創造集団代表取締役]

平和の意味を捉え直し 社会をデザインする

ニューロゴというのはニュートレードマークであり、ニューデザイン。「ピース」はそのロゴに象徴されるどういう意味が必要なのか。ピースマークということ自体が新しく考え方直されるべきではないのか。それを、探っています。

20世紀はヨーロッパ、アメリカ東海岸など大西洋沿岸の時代でした。けれども今、コンピュータやエコロジーの分野をはじめ、アメリカではポートランドやサンフランシスコなど西側が盛り上がっています。また日本もその中心にあり、アジアの国も含め、太平洋が様々な問題を解く鍵を持っているのではと注目しています。平和主義者などをパシフィストといいますが、パシフィック・オーシャンは太平洋。太平で静かな海。平和というのは、戦争をしていないことではなく、「心安らかな静かな状態」のことだと思います。

キリスト教もユダヤ教も皆、自分の宗教を大切にし、自分の家族や周囲の人達は幸せにしたいと思う。しかし、それと同じことを考えている違うバックグラウンドの人達と折り合いがつかず戦争になっている悲劇がある。*

現代は叡智が求められる時代だと思います。問題を本気で解決するためには賢さだけではなくて、それを越えた叡智が必要です。警告を与えて方向を導くだけでなく、ヘリコプターのように遠くから世界的な状況をみて、情報として把握することが必要なのだと思います。

* イスラエルのエルサレムは1km四方程の中にキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の聖地があるがそこでは戦争は起きていないという。しかしそこから車で30分行ったところでは戦争が起きている。



講演者プロフィール

黒崎輝男（くろさきてるお）

流石創造集団株式会社 C.E.O.。アンティーク家具輸入販売を業務とする黒崎貿易株式会社設立後、「IDEE」を創立。『生活の探求』をテーマに生活文化を広くビジネスとして展開。2005年、廃校となった中学校校舎を再生した『世田谷ものづくり学校（IID）』内に、新しい学びの場『スクーリング・パッド』を開校。

良い問掛けがサステナブルな 価値観を創る

人口問題、平和の問題そして環境問題というのはつながっていて、全部一緒の問題であると思います。サステナブルな社会になるには、今までの価値観を変えなければいけない。お金やエネルギーを使わなくとも、良い生き方というのはいっぱいあるだろう、という風に価値観を変えていかなければいけない。問題に対して、急いでガツガツ正解を狙うのではなく、いい問いかけをすることが良いデザインであり、新しい価値観をつくる。そういう問いかけを続けていくこと、が、とても大切なのではないかと思います。

世界の活動報告・1

「O₂ global Network 活動報告」

アーネスト・ヤン・ヴァン・ハッタム [O₂ Global Network 代表]

「成長の限界」から 34 年。 しかし人間の振る舞いには、 充分な変化が見られない

昨年、デニス・メドウズ氏のスピーチを聴く機会がありました。彼は 45 分の講演のうち 40 分、習慣や振る舞いに変化を見出さなければならないという話をしていました。その理由というのは、彼の著書『成長の限界』が出版されて 34 年間経ても、人間の行動には全く十分な変化がなされていないからだということでした。組みなれた腕を上下逆にすると違和感があるように、普段の行動や振る舞いを変えるのは大変難しいことです。けれども、このような逆の習慣は 21 日間続けることで習慣化されると言われています。

ガンジーは「この世界に望む変化に、あなた自身が成ってみせなさい。」と言っています。

行動の変化ということに対してデザイナーが何ができるか。それは、私たちの手によってリ・デザインするということです。デザインを用いてコミュニティを促進したり、エコロジカル・フットプリントを減らしたり、生活者にサステナブルな概念を植え付けたりしていく。デザインを社会に還元していくことが大切です。

サステナブルマインドのデザイナーを つなぐ O₂ Global Network

O₂ Global Network の全ての始まりは 1988 年です。ミラノ・サローネを訪れた時、サステナブルなものがひとつもないことに気付きました。そこで同じような興味



講演者プロフィール

Ernst-Jan van Hattum (アーネスト・ヤン・ヴァン・ハッタム)
インダストリアルデザイナー、O₂ Global Network 代表。デルフト大学でインダストリアル・デザイン修士号取得。早くからエコデザインを取り入れ、1998 年～2002 年オランダ経済省の一部組織 Innovation Relay Centre Netherlands にてシニア・プロジェクトマネジャー、マネジャー代理を努める。

関心があるデザイナーを集め、O₂ が生まれました。O₂ というのは酸素を意味しますが、サステナビリティのためのシンボルです。O₂ の活動目的の中核には、「Inspire (感情を掻き立てる)」、「Inform (知らせる)」、「Connect (繋ぐ)」があります。現在、82 ヶ国以上のコンタクト・ポイントがあり、1,500 人以上がメーリングリストに登録しています。メーリングリストのメンバーは、年々増加しており、ここで、情報を共有することはもちろん、意見交換し、新たな活動が起きています。

Dreaming — 夢をもつこと

重要なのは、一部の物事は予想ができるということです。一部の深刻な問題というのは、そこまで早くは変わりません。昨年のサステナブルデザイン国際会議※でフィリップ・ホワイト氏も言っていた「Green Dream」という概念があります。夢を持つことにより現実を良い方向へ導いていく。ひとりでも多くの人がそのような行動することにより、世の中は良くなるということです。困難の向こうを見て、ひとりひとりが頭の中に未来をデザインしていくことが大切です。それを実現するには、知識をグローバルに共有しながら、ひとりひとりが変革すること。そして最大限に未来に向けて夢を持つこと。そういうことがサステナブルな未来を実現するために根底として非常に重要で、サステナブルな未来を作っていくと思います。

※昨年度サステナブルデザイン国際会議内容はホームページをご参照下さい。www.ecodesigninstitute.com



世界の活動報告・2 「デザインによる地域資源の活用」

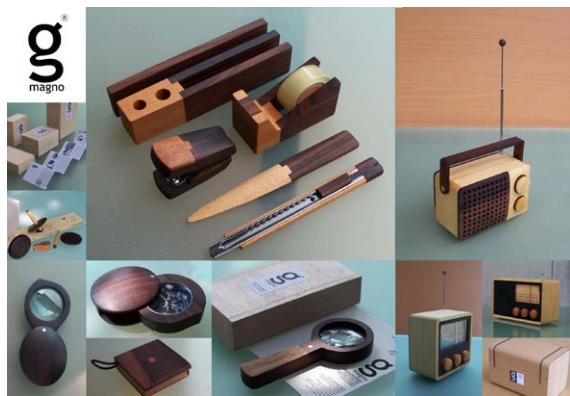
シンギー・カルトノ [インダストリアルデザイナー、piranti works 代表]



講演者プロフィール

Singgih S Kartono (シンギー・カルトノ)

インドネシア・ジャワのバンダン工科大学でプロダクトデザインを学ぶ。卒業研究「インドネシアのハンドクラフト技術を用いたラジオのデザイン」で1997年度 International Design Resource Award 受賞。ハンドクラフトを専門とする企業のデザイナーを経て、2003年 piranti works を設立。



村は国の縮図

インドネシアは「村」で成り立っている国で、村は国の縮図であり、そこでは小規模ながら人々の生活や文化、経済活動があります。しかし村の現状は決して望ましいものではありません。村から都市へは非常に沢山の人的資源、自然資源、食糧、資本が流れていきます。私は都市で教育を受けましたが、生まれた故郷の村に帰ることにしました。私は故郷の村で育ち、つまり、故郷の村が私に「投資」をしてくれたと考え、私も得たものを村に投資したいと思ったからです。

"Magno" — マグノ 小さな物に焦点をあて、 社会をデザインするニュークラフト

現在、私が力を入れている Magno という「ニュークラフト」は、既存の職人技能を基に、近代的生産管理手法を応用したもので、従来のクラフトにはなかった生産マニュアルや仕様書を備えています。このような新しい管理手法を用いることにより、技能習得、生産計画、管理が非常に容易になりました。クラフトは非常に労働集約的な生産活動でありながら、専門的技術を必要とせず、少ない投資額で始めることができます。

"Less Wood More Works"

これは私の会社のモットーです。材料の木を節約しながら、沢山の労働を創出していきたいという考えを表しています。これまで薪に使われていた木材を、例えば小さなステーブラーにすると、沢山の雇用を創出し、価値を高めることができます。

私は、村でより多くの生産活動が行われ、そして集まった資本を再投資して、より多くの生産活動が行われていくことを願っています。そして、人々の思想や思考を変え、村自体の産業構造も変えていくことにより、力強い「村」を作りたいと考えています。

それがひいては、インドネシア全体を強い構造の国にすることを願っています。

※ magno (マグノ) : magno というブランド名は Magnifying Glass (拡大鏡) のスペルから作った造語。日本をはじめ欧米の販売を開始し好評を得ている。売上げから、原料の木材の保護育成活動へ寄付を行っている。

ワークショップ

サステナブルな社会を構成すると考えられる要素をテーマに設定した全員参加のグループディスカッション



ワークショップでは、サステナブルな社会の実現にあたり重要なテーマを「A・暮らしを描く」と「B・社会を描く」に分けて議論およびアイディア出しを行った。

参加者 115 名全員参加によるワークショップテーマは A、B あわせて 16。8 テーブルに分かれて、最終的には 128 枚ものワークシートが会場を埋め尽くした。



「住まう」チーフ
宮脇伸歩
株式会社 INAX
総合技術研究所サステナブルデザイン研究室長



「着る」チーフ
植松豊行
松下電器産業株式会社
上席審議役（デザイン担当）



「着る」チーフ
久保雅義
京都工芸総合大学大学院
工芸科学研究科教授



「食」チーフ
中川謹美
京都吉水・銀座吉水
代表取締役



「食」チーフ
森 哲郎
しあわせ創研 代表
ロハス・ビジネス・
アライアンス 理事



「健康」チーフ
秋谷英紀
トヨタ紡織株式会社
デザイン部



「仕事」チーフ
西村澄夫
株式会社岡村製作所
開発管理部長



「娯楽・文化」チーフ
永木康人
日本電気株式会社
宣伝部デザイングループ
グループマネージャー



A ファシリテーター
「教育」チーフ
川原啓嗣
名古屋学芸大学大学院
メディア造形研究科教授



「娯楽・文化」チーフ
牧野克己
日産自動車株式会社
デザイン本部
カラー・デザイン部部長



「コミュニケーション」チーフ
加藤公敬
富士通デザイン株式会社
代表取締役

Workshop

A

暮らし を描く

「住まう」「着る」「食」「健康」「仕事」「娯楽・文化」「コミュニケーション」「教育」についてワーク

ワークショップの進め方

ワインナ・カフェスタイル Vienna Café Style

「ワインナ・カフェスタイル」のワークショップでは、テーマが変わるたびに参加者もテーブルも変わる。テーブルが変わるたびに新しいメンバーとの新鮮なディスカッションが展開される。チューターの紹介する各テーマのキーワードを呼び水に、ディスカッションをし、アイディアをテーブルクロス（模造紙）に描き綴る。



Workshop

B

社会を描く



「流通」チューター
廣川由美
大阪市経済局



「街・コミュニティ」チューター
高田友美
株式会社地球の芽



「移動」チューター
布垣直昭
トヨタ自動車株式会社
東京デザイン研究所デザイン
本部東京デザイン部長



「移動」チューター
大島 誠
トヨタ紡織株式会社
デザイン部



「安心・安全」チューター
川本誓文
大阪府
産業デザインセンター
主任研究員



「金融」チューター
森 哲郎
しあわせ創研 代表
ロハス・ビジネス・
アライアンス 理事



「社会制度」チューター
和爾祥隆
創造学園大学教授



「自然・資源」チューター
石田秀輝
東北大大学院
環境科学研究科教授



B ファシリテーター
「エネルギー」チューター
益田文和
実行委員長
東京造形大学教授

「流通」「街・コミュニティ」「移動、安心・
安全」「金融」「社会制度」「自然・資源」
「エネルギー」についてワーク

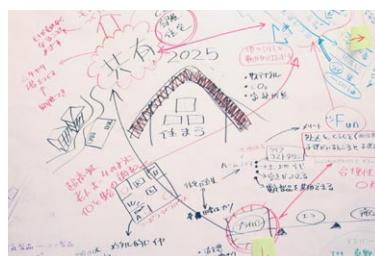
A 暮らしを描く 成果

テーマ「住まう」「着る」「食」「健康」「仕事」「娯楽・文化」「コミュニケーション」「教育」について議論されたサステナブルデザインのアイディア、検討されたことを要約し、紹介します。



「住まう」

- バリューマーク・プロダクト
- 心的価値を高めるライフスタイル
- シングルリビング
- 少人数暮らしが進んでも家族の暮らしは大事にしたい
- 家は知の集まるところ
- 居心地のよい精神的な空間であるべき
- サステナブルマネジメント基本法(SMK法)を策定: 車やパソコン、土地の保有可能数の設定。それ以上持つと税金がかかる、環境関連に使われる
- 苦労させる住宅
- 楽をするためにエネルギーを使うのではなく、楽しむために使う住宅
- 集合住宅はすべて介護対応になっている
- ダイエットをするとエネルギーが蓄積される家
- かっこいい田舎暮らし
- コミュニティと自然が取り込まれた住宅
- 所有しないほうがかっこいい
- 清貧に暮らす価値感
- 周囲に無関心にならない暮らし
- 家庭菜園により、コミュニティを形成する



「着る」

- リフォームファッショントリペアファッショントリペア事業の活性化
- リサイクル事業を強化
- ファッショントリペア事業からデザイン・テラー事業へ
- SMK法: 古着に注目した古着Biz
- 大量消費からの決別
- ストックからフローへ。クリーニング屋が洋服の中心的社會のインフラになる。洋服は借りて着る
- 永く着る、大切に着る
- オーガニックマテリアル、バンブー繊維やパインアップル繊維を着る。トップデザインブランドからそういうた素材のものを発信する
- エコの見える化
- ちゃんと作る。一糸入魂
- 身体変化や個性拡大へ対応
- 大量生産から必要なものを作るしかけ、生産側・消費側の意識改革、教育



「健康」

- 体の健康と心の健康のバランス ● 朝の挨拶でお互いに顔色を確認 ● みんながお互い関心を持って、関心をもつことで心のバランスをとる。Face to Face コミュニケーションなど、コミュニケーションでメンタルな健康を育む
- 家庭愛 ● バランスのよい食事 ● 教育が肝要 ● 薬レス社会 ● 農薬レス社会 ● 自分自身の健康を自分で責任を持つ
- 自然のリズムとの調和



「食」

- 農家から直接消費者に配られる食物 ● 生産者がスーパーで店を持ち、そこで買った食材をスーパー内で加工する ● 捨てない、生ゴミを出さないサステナブルメニューの普及 ● 生ごみ禁止法 ● 世界に日本のサステナブルフードを普及させる ● カロリー取りすぎ禁止法 ● 食べ過ぎない、1800kcal を守る



● 米を食べる ● 地産地消 ● 食事を楽しむことで五感や感性を養う ● 自給率を上げる ● 自分の自給率を把握する ● 自分で生産し自分で食べる ● 遺伝子操作穀物でもバイオエネルギーに利用され食べられない。食を優先に考える ● 遺伝子組替作物は種がとれずアメリカから種を買わなければならない。この問題を解決することがサステナブルな食の実現には欠かせない ● 徹「農」制：企業の仕事の一環として畑に耕しに出かける ● 安心安全な食情報、トレーサビリティ ● 添加物の多い食品（インスタントフード、ファーストフード）をやめる ● 百兆の細胞をコントロールできるのは自分だけ。細胞に忠実に生きる ● 命の貴さを考える ● おもいきりマクロの視点を見る

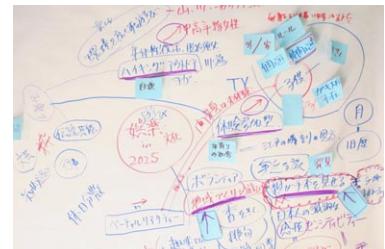
「仕事」

- 仕事と人生の両立が大切 ● やりがい ● いきがいこそがサステナブルに必要 ● 人間らしさ ● 夢 ● 2025年までには技術革新・法整備により、時間のゆとりができるだろう ● 時間を手に入れたときわれわれは何をしたらよいのだろうか？ キーワード「DIMKS」。「M」は「Many」の意味。ゆとりのできた時間で、たくさん子供と心豊かに暮らすということがサステナブルな社会ではないだろうか



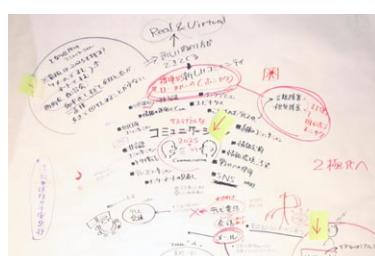
「娯楽・文化」

- 体験参加型の旅。雪おろし、田植えを体験する ● 伝統芸能を楽しむ ● 粋な遊び ● 消費・浪費しない正しい遊び方 ● パーチャルリアリティはもっと進み、リアル体験に導くためのきっかけになるのでは ● 日常生活の些細なこと、生活の工夫を遊びとする。楽しむ。例えばごみの分別、家事 ● あそびは子供だけのものではない。子供から老人まで継続されるもの。大人の遊ぶ姿を見て子供も学ぶのではないか ● 心で遊ぶ ● 四季を楽しむ ● 文化的な娯楽 ● 地域祭り強制法 ● すべてのチームから見られたキーワードは「祭り」 ● コミュニティ ● 伝統的からだ ● こころ ● 未来に残したいものは祭り



「コミュニケーション」

- テレコミュニケーション ● 異文化への理解 ● インフラ技術は2025年はさらに進歩しマルチメディアの性能は飛躍的に高まる ● パーチャルリアリティはリアル（本物、現実）と方向性が違うのではないか？リアルとバーチャルの境目の認識が必要 ● インターネットの在り方の見直し ● Face to Face コミュニケーションとその質の重要性



● 情報を読み取るスキル、伝えるスキルを鍛える ● 礼儀、礼節、心 ● インフォメーション・エクスプレッション ● 多くの人が簡単に使えるコミュニケーション方法、ペーパーレスなどコミュニケーションにおける環境負荷の低減。この2点によりサステナブルなコミュニケーションが成し遂げられる

「教育」

- 教育の基本は家庭 ● 学校教育も大切だが、おばあさん、親などのからの知恵の伝達が大事 ● 人対人の教育。熱意は人から学ぶ ● 子供は大人をみて学ぶ ● 初等中等教育は基本知識は土台をつくる ● 現場主義、体験型教育 ● 耳から知る座学だけではなく、本物を知る、体験すること、慣れることが大切 ● 考えること、学ぶことは本来楽しいこと ● 考え続けることが大切 ● 先生も学ぶ ● 先生を通して先見性を学ぶ ● ファシリテーターの役割が重要 ● 個人としてどうあるべきかを知る仕組みがあることがサステナブルな教育のあり方。



Workshop

B

社会を描く 成果



「流通」

- 流通、特に広域流通は不要
- フルカスタマイズ流通
- 足を運んで買う楽しさを維持しながら流通を解決する方法を
- 音楽ダウンロード等電子流通の発達
- 地産地消
- 都市での地産地消を考える
- 運送手段、例えばトラックの CO₂ 排出を大幅削減する
- 共同購入でトラック使用台数減らす→コンビニに共同配送
- 企業利益より社会利益優先
- 我々は物を持ちすぎ
- トレーーサビリティ
- ICチップ、QRコードで CO₂ 排出量やバーチャルウォーター情報がわかる仕組み



「街・コミュニティ」

- 暮らしと緑や食物を作る所を近くする
- エディブルランドスケープ
- 暮らしの中に食べられる植栽を
- オールドタウンの問題
- いきいきしたコミュニティには異世代交流が大切
- 異世代交流の促進でご近所づきあい、おこそ分けが自然発生するだろう
- コミュニティは必要か
- コミュニティ作りが目的ではなく、コミュニティにより成し遂げられることが目的
- 半完成の町で町作りを通じ愛着を育む
- 都会に田舎の要素を持つてくる
- 京都の長屋のようなスタイルの付き合いの仕組みを広げる
- 祭り等を積極的に生かし地域の取り組みを促進
- 他文化交流
- モバイル式滞在等の仕組み



テーマ「流通」「街・コミュニティ」「移動」「安心・安全」「金融」「社会制度」「自然・資源」「エネルギー」について議論されたサステナブルデザインのアイディア、検討されたことを要約し、紹介します。

「移動」

- 所有から共有へ
- 車の所有の必要はなし
- レンタル、公共交通を活用
- トランスポーテーションに関わる企業のネットワークでシフトを促進する
- モーダルシフト
- モーダルシフト

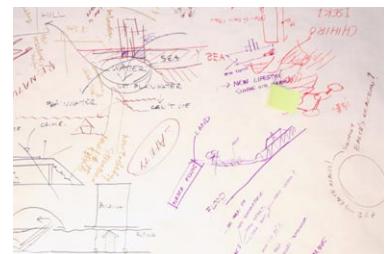


トに関連するファシリティの整備

- 自転車道等整備
- ミニマル・トランスポーテーション
- 人力
- 自転車
- 歩くことの見直し
- パーク・アンド・ライド
- フリーパーキングの普及

「安心・安全」

- 職業、雇用の安全が果たされる社会
- サブシステム、バックアップシステム、安全安心は個人が選択
- 個人年金もメニューが豊富で解りやすくなる
- 地域の中でサバイバルできる仕組みが必要
- 災害に備えるにはひたすら訓練が必要
- 頭よりも体で覚える
- 身体性の必要
- 体と心
- 真っ先に救済されるのは体であるが心のケアも重要。心が壊れると体も壊れてしまう
- 偽装と正義、倫理
- 偽装社会は滅びる
- 正確な情報を世間が求めている
- 商品価値は情報が決める
- 商品サービスに透明性を
- 海面上昇するので都市構造を「浮島」化する
- 母屋から離して大切な物を保管する蔵の機能をコミュニティに活用
- 分散型備蓄、食料備蓄施設を中心としたコミュニティ
- サステナブル教を作り、信仰心を高め、サステナブルな社会を作る



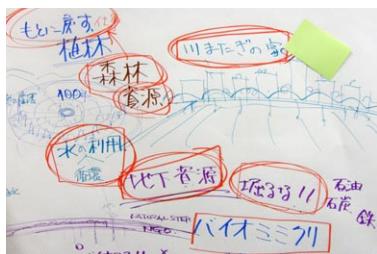
「金融」

- 環境という分野はそもそもお金に関係のない分野であったが考えなければならない状況である
- タイの国王が「足るを知りなさい」という発言をした
- お金を預けるのではなく、文化や習慣をファンドに預ける
- すべてがフェアトレードになってくる
- お金の価値がどんどんなくなる
- お金を持っているどんどん価値がなくなるので、精神的な満足を得やすくなる



「自然・資源」

- ありあまる CO₂で沢山植物を育てる ● CO₂を資源として活用する
- リサイクル資源を含む地域資源活用を目的としたワークショップ・イン・レジデンスを事業化。(白川村長に提案済)
- 川をまたいで立つ家。水と水力を最大限利用する「川またぎの家」



- バイオマス資源をエネルギー、マテリアルとして最大限活用する
- 自然を敬う精神欲を満たす
- 人工物の中にあるリサイクル鉱山、資源循環システム構築
- 水田の環境的効用を再評価

「エネルギー」

- トロピカルな雨は強い。気象変動により日本でもそうした雨が増えるだろう。降雨のエネルギーを活用する
- 風力、波力等を利用した発電など日本の気候にあったエネルギー利用を開発する
- 日本中のゴルフ場のすべてをソーラーパネルで埋め尽くす
- 極小エネルギーの活用
- 一度作った電気や熱などのあまったエネルギーをなくなるまで活用
- エネルギー利用量の可視化により省エネを促進
- 自然のサイクルの中で暮らす
- サマータイム
- 夏は避暑地にオフィス
- 季節ごとに適した場所に住む、働く
- ヒートボックス、自然界の熱エネルギーをストックする



「社会制度」

- 制度の発信やキープの仕組みも変化している
- 社会制度は制約が厳しい一方、曖昧でモラルの部分もある
- 現状制度は規制型で新しいことや有益なことをしようとすると障害になり、そのすき間を抜けばよいとなってしまうので、促進方、ムーブメントの制度が必要ではないか
- サステナブルなプロジェクトのコンペティション
- S(サステナブル)マークの振興奨励
- 各自治体により異なるごみ分別や、年金など、わかりにくい制度をわかりやすくデザイン
- デザインで見える化していく
- 社会福祉程度徹底、格差の解消、格差は放置するとネガティブな連鎖が生じる
- 環境教育をできるだけはやく実施する。知育、体育、食育、モラル、啓蒙という大切な側面を持っている
- ネガティブなイメージのある「ごみ」という言葉を新しい資源であるという、意味の変容も教育によって実現できるのではないか



エコイノベーションで実現する サステナブルなライフスタイル (目標年 2025 年)

本ワークショップでの内容をまとめ、サステナブルな社会における暮らしの姿を一覧できる絵巻を作成し、「地球温暖化に関する総理懇談会（2008年5月26日）」にて山本良一教授（サステナブルデザイン国際会議組織委員長）により、提出されました。

■表面：サステナブルな社会の生活シーンや社会テーマのシナリオとその事例、また、その実現に必要なエコイノベーション、現在の課題を記載

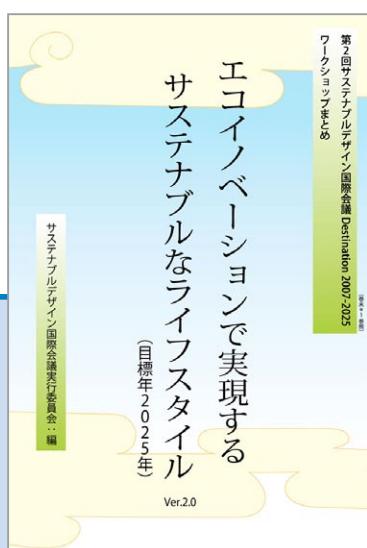


裏面：各テーマにおけるサステナブルな社会のキーワード、エコイノベーションを推し進める中にも生かしたい先達の知恵や価値観の拠り所となりうるワードリスト。また、学生の提案によるサステナブルなライフスタイルを記載。



■ 詳細はこちらのホームページからご覧いただけます。 www.ecodesigninstitute.com

ホームページにて Ver.2.0 (発行日: 2008年7月7日、「地球温暖化に関する総理懇談会（2008年5月26日）資料」の改訂版) を公開しています (随時更新予定)



国際若手デザイナー ワークショップ中間報告



2025 年の私たちの暮らしを想像してみてください。

地球環境といかに共存し、

サステナブル（持続可能）な社会をどのように造り上げるか。

「2025 年のものづくり名古屋の姿」を

想像してみてください。



「未来のために今デザインができること」

今回の国際若手デザイナーワークショップ 2007 では、誰にとっても極めて身近で、かつ切実なこのテーマを、5カ国 21 大学・企業の次世代を担う若手デザイナー 24 人が問い合わせ、提案を行った。

参加メンバーは、東京ビッグサイトでの世界最大級の環境技術・製品の展示会「エコプロダクツ 2007」の取材を皮切りに博物館などを視察し、歴史と伝統、未来と技術、過去と現在の側面から「2025 を見据えたサステナブルな宝探し」を検証。中部地域に場を移し、産業の発展の中で効率化のスキルを蓄えてきた名古屋地区のサステナブルな暮らし・まちづくり・モノづくりを学んだ。また、世界文化遺産・白川郷でサステナブルな暮ら

しを体験し、本会議にて参加した。

その成果は、12 月 25 日、名古屋の国際デザインセンターで「2025 年のサステナブルな社会における、ものづくり名古屋の姿」として発表された。言葉や文化の高いハードルを乗り越え、溢れんばかりのアイデアで最終ゴールを目指そうとする若いクリエーターたちの圧倒的なエネルギーとパワーに感動を覚えたワークショップであった。日本のみならず国際社会の多くの若いデザイナーがそのビジョンを引き継ぎ、よりよい世界を築いていって欲しいと心から願っている。

キュー・リーメイ・ジュリヤ

プロディーサー [国際デザインセンター 海外ネットワーク・ディレクター]
(IdcN 機関紙「NOC Vol.98/Mar-Apr/2008」より)

■ チューター

益田文和
(ますだふみかず)

東京造形大学教授／株式会社オープンハウス代表取締役／エコデザイン研究所代表／O2Japan リエゾン

本田圭吾
(ほんだけいご)

桑沢デザイン研究所プロダクトデザイン専任講師。HONDA KEIGO DESIGN

Aaris Sherin
(エアリスシェリン)

ニューヨーク・セント・ジョンズ大学グラフィックデザイン准教授。サステナブルデザインの第一人者

瀬川晃
(せがわあきら)

IAMAS 国際情報科学芸術アカデミー講師 DIT コース／名古屋造形芸術大学、国際情報科学芸術アカデミー卒業

Wei Li
(ウェイリー)

北京工業デザインセンター・サステナブル開発 R&D センターデザインディレクター

渡邊敏之
(わたなべとしゆき)

名古屋造形芸術大学准教／武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科卒業／授情報デザイナー



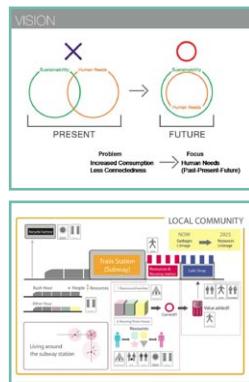
本事業は国際グラフィックデザイン団体協議会 (icograda)、国際インダストリアルデザイン団体協議会 (ICSID) の承認により開催されました。

Team A 提案：

「サステナブルごみステーション」

テーマは「2025年持続可能な社会に向けたごみ資源循環」。持続可能社会のためには「人間は不変に欲するもの」に限りなく近づけることで脱物質化を図る必要がある。そこで多くの課題が山積するごみの流れに着目し、持続可能社会におけるごみ循環を検討した。「ごみ」という「-」イメージは払拭され、日本固有の「枠」や「通」の精神と環境教育の推進により「+」イメージの「資源」と認識。駅の構内にごみ置き場が隣接し、効率的な運搬を実現。また、ごみを資源として地域の人と再利用・共有したい、お互いにごみ資源の管理を起点にコミュニケーションの充実をはかる。このようにごみステーションを中心としたサステナブルコミュニティが形成される。

■チューター：ウェイ・リー / 北京工業デザイン振興所・サステナブル開発R&Dセンター（中国） ■リーダー：伊藤 大毅 / 東京大学 ■メンバー：小野 真理香 / 東京造形大学、近藤 崇司 / 名古屋市立大学、佐藤 純香 / 名古屋学芸大学、タナッタ・コーシーハデー / チュラロンコーン大学（Thailand）



Team B 提案：

「サステナブルライフを愉しむコンドミニアム & ホテル」

地産地消で成り立つコンドミニアムホテルのシステム提案。日常の習慣を変えるのは容易ではない。サステナブルライフを一時的に体験、実践でき、普段の生活に取り入れるための方法や経験をシェアする場としてコンドミニアム & ホテルを提案する。サステナブルな暮らしを選び、実践して愉しみ、定着させることで、サステナブルなバランス社会の礎になる。ここでの基本はワークシェアリング、地産地消。エネルギー、食材、衣類は人々の活動により生産される。情報や経験のシェアはライフスタイルからコミュニティのシェアへ。やがてサステナブルなライフスタイルの豊かさが全国、全世界へ広がり、サステナブルなバランスがとれたライフスタイルへシフトする。人々はサステナブルなライフスタイルの豊かさを知り、より身近な暮らしの中でそれを楽しむとなる。

■チューター：本田圭吾 / 桑沢デザイン研究所プロダクトデザイン専任講師 ■リーダー：丹聰子 / 桑沢デザイン研究所講師 ■メンバー：松田大輔 / 愛知産業大学大学院、渡辺唯 / 筑波大学、Sirinracha Aursirisub / IAMAS 国際情報科学芸術アカデミー、Chulalongkorn University (Thailand)

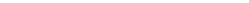
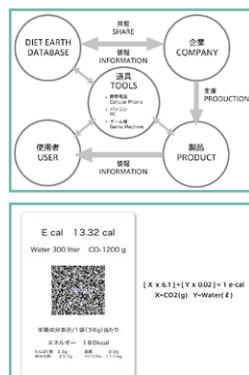


Team C 提案：

名古屋から発信する「楽しみながら環境負荷を減らす」システム "DIET-EARTH" と "E-Cal"

私達は仮想の非営利団体(以下NPO)「DIET-EARTH」と、新しい国際単位およびシステム「E-Cal(イーカロリー)」を提案する。E-Calは、家電や食品、建築物等すべての製品が生産される過程において排出されるCO₂と水の使用量から、製品の環境負荷をE-Calという単位で算出する。NPOであるDIET-EARTHは、E-Cal算出基準の公平性を保つ役割を担い、企業はその基準に基づき製品のカロリーを算出し、情報を貼示して販売する。消費者は手に取る製品がいかに環境に配慮されているかをE-Cal表示により知ることができる。購入した製品のE-Calはリアルタイムにデータベースに記録され、消費者はそのカロリーをもじいてカロリーの低さを競い合うゲームをしたり、日記のように記録したりする。楽しみながら環境負荷を減らす事ができるE-Calは個人の活動から国、世界へと広がっていく。

■チューター：瀬川 晃 / IAMAS 国際情報科学芸術アカデミー講師 DIT コース ■リーダー：池之上 智子 / ブラザー工業株式会社 ■メンバー：ウェイ・チャング・ウー / シー・チェン大学大学院、インダストリアルデザイン(台湾)、齊藤 美貴 / 名古屋芸術大学、インダストリアルデザインコース専攻、泊 誠一 / 桑沢デザイン研究所、デザイン専攻科プロダクトデザインコース



Team D 提案：

「ナゴヤカ DELTA」

2025年のサステナブル社会を見据えたシステムを持つ、アートコミュニティ「ナゴヤカ DELTA」。創造的な文化を生み出す国際的なビジネス都市として2025年までに名古屋の中心地となり、精神的に潤う場となることを想定。持続可能な社会を生きるために、物質的なもので満足するのを止め、精神的満足を得ることが重要だと考える。「和やか」な暮らしを基盤に、名古屋が潤うことを願ってこの名前を付けた。Delta(三角州)はクリエーター、消費者、企業の三要素を意味する。

■チューター：エアリス・シェリン / セント・ジョンズ大学、グラフィックデザイン(アメリカ) ■リーダー：河東田 文 / 武蔵野美術大学、デザイン情報 ■メンバー：海田 奈々 / 名古屋造形芸術大学、産業デザイン、加藤 健太 / 名古屋工業大学、建築・デザイン工学、梁 秀川 / 中央美術学院、視覚伝達デザイン(中国)、渡辺 美貴 / 多摩美術大学、油絵



クロージング・ミーティング



現在おこなわれている私達の多くの活動は、現実の地球の『器』から大きくはみだしてしまっている。

私達が目指すサステナブルな社会を実現するためには、これらの活動の規模や速度を『適切な』大きさに整えていかなければならない。一連のワークショップをとおして、異なる国籍や多様なバックボーンを持つデザイナーたちがさまざまな角度からあるべき未来を描き、今なすべきことについて考えた。限られた時間内で全ての疑問を明らかにすることは困難であったが、クロージング・ミーティングでは、新しい課題を見つめ、また、方向を垣間見ることができた。その一部を紹介する。

会議は各参加者が各自の、また、本会議についての今後の展望をまとめその意欲を来年に向けて継続する事を確認して、幕を下ろした。



クロージング・ミーティングにて参加者が書いた会議への希望や提案の一部を紹介する。

デザイナー以外の人も交えて会議するべき

分野に囚われず巻き込んで行く。エンジニア、企業トップ、産業界、デザイン界、学会、消費者、政府、デザイナー、子供、お父さん、お母さん、家族など、様々などとの抱える問題を知りたい。幅広い人への情報提供と参加誘致。教授や教育関係者が参加すれば、学生そして社会へつながり裾野が広がる。異業種のネットワークを組む。

興味のない人こそ巻き込んでゆくべき

サステナブルな概念を全ての人が共有する事は理想だが、逆に全ての人が同じ考えでは危険もある。しかし、現在の危機をのりきるためにには人のムーブメントが必要。どうやって部外者へメッセージを伝えるか?根気よく続ける。100人に伝える。そうすれば少しずつ身の回りのことを考える人が増えてくるのではないか。デザイナーの特技は「魅力」をかたちにすること。この会議に興味のない人がすんでサステナブルな社会実現に貢献したくなるような魅力を創出するのがデザイナーの役割でもある。

どう 2016 年のランドマップをしづってゆく?

ターゲットである 2024 年が内容としてつながったほうがいい。そして、2025 年の日本の姿を現実的にどんなビジュアルか、純度の高い空想をめぐらして、サステナブルな社会の姿を具体的に伝達する絵を描く。サステナブルな提案をできるだけ盛り込み、サステナブル概念を啓蒙、拡大していく。デザインによって、人々の心に働きかけその実現を目指す。実際の活動の中でそれぞれが反省する事が必要。

ミクロ視点でじっくり見て、マクロに考える

会議を様々な地域で代表者同士で行い、発表し合う。地域を小さくして限定する事によって、その土地の問題がはっきりする。それを国内の会議で発表する場を持って、国内で全体のロードマップを描く。国内でまとまつたものを国際会議で発表する。そうすれば繋がり、協力して問題解決ができるのではないか?

企業がからまないとすすまない

会議の前に各企業で具体的なロードマップを考え、それを会議で発表、達成率を報告する。達成率の低い企業はワークショップで意見を求め、実際に活かして行く。達成できた企業はサステナブルな商品を紹介できるなどのメリットがある。サステナビリティを推進する事で企業メリットが生まれるようにマネジメントしていくかないと進まない。

子供サステナブルデザイン会議

子供がサステナブルな未来を描くワークショップ。主婦会議、学生会議など色々なサステナブル会議の開催。小さなグループの会議があり、そのまとめにサステナブルデザイン国際会議がある。

心の豊かさについて考える会議

サステナブルな暮らしはハイクオリティなくらし。心理学関係者、音楽家、アーティストなどをよび、心の豊かさを考える会議をする。

話し合いだけで終わっては意味がない

情報過多になりがちな会議スタイルの変更時期。勉強するだけでは変わらない。毎年同じレベルの話やアイディアで終わるのではもったいない。ソリューションまで行き着き、それをどうするかまで話し合う。事前課題をつくり、予習してから参加。毎年何か決め、次の会議までに実現し、発表する。サステナブルデザインの種を植えて数年後に芽が出るしくみに。

デザインしか知らないデザイナーになってはいけない

社会のこと、世界のことなど、広い分野の知識を知って、デザインに還元してゆけるといいと思う。デザインは持続可能な発展を促す可能性があるが、デザインが全てではない。

「体験」+「JUST DO IT」

「体験」ということが重要との意見が多かった。しかし我々自身があまり体験していないのでは?情報だけの理解は危険。机上論ではなく、体験し、実感して、解決する。少なくとも半日は実際に体を通してサステナブルな実体験ができるような仕掛けに。

今回のネットワークから有志でプロジェクトを

コミュニティという言葉が、分科会の中でキーワードとして多く上がった。この会議を新しい人間関係を育む仕組みとして発展させる。問題点が集約され始めている。具体的なソリューションとなるプロジェクトを発足する。

TV、WEBで会を放映。もっとオープンに

広めたいのであれば、もっと人目に公開しないと意味がない。TV、WEB、新聞、ラジオなどメディアで共有・発信してゆく。市民が会議の報告を早く知りたくてたまらない状況づくり。

直接来なくても学べる仕組みづくり

インターネットやバーチャルなネットワークを利用してどんな場所からでもアクセスできる会議にする。もっと社会的かつ一般に大きなインパクトを与えられるように広報活動を強化。

世界の環境改革の成功例を発表する

地域でっと互いに共有し合う。持っている知識、経験を共有し合う。そのために、"会議"のようなかたくるしいものではなく、色々な人が集まれるディスカッションの場をひらく。

ゼロエネルギー・イベント

移動に多くのエネルギーを使用してしまったので、そのカーボンオフセットをする。ゼロエミッション会議にする。

「Terran(地球人)」という新アイデンティティ

いるべき場所にあるべきように住むのは美しい。野生の動物がたくさん美しいのは、自然のなかにありのままに生きているから。人間もあるべきところにおさまればいい。人類を、「Terran(地球人)」という新しいアイデンティティで考える。

問題が起こっている国で開催する

過疎の村や今にも沈みそうな国の人たちの深刻な状況、生の声をきく。平和な所ではのうのうとした考え方や空想になりがち。社会問題を考え、危機感のリアリティをシェアするには施設が整いすぎている。電気がない場所や自然に近いところで開催する。

サステナブルデザインマーク・Sマーク設立

デザイン団体、後援団体へのもっと強いよびかけが必要である。各団体のコンペやセミナー、イベント活動に、サステナブルデザイン国際会議の要素を入れ、幅広いデザイナーに呼びかける。自治体へも呼びかけ、サステナブルな思想をもつ都市を選び、表彰したり、サステナブルデザイン宣言をしてもらう。

サステナブルデザイン日めくりカレンダーメール

私たち自身がサステナブルにならなければならない。しかし、家に帰えるともどおりの生活…?どうすれば毎日この問題を自分の事として行動できるか?セルフコントロールすることをアシストする、日常生活に活かせる具体的な提案や、実感のあるちょっとした情報がメールで毎日届く。

サステナブル・リーダーが導く

エコかっこいい大物タレント。魅力的なエコアイドルをプロデュースし桜にし、そのファンをまきこんでゆく。

大量生産に囚われないデザインを

「プロダクト」という言葉はサステナビリティを考える上でスタッフさせる。私達はあまりにもインダストリーなものばかりで生きている。コンビニの食べ物にしても、製品である。もっとハンドメイドなものを。「大量生産」という考え方を捨て、クラフトという言葉でサステナビリティを考える。プレゼントは「物」ではなくハグやキスを。

日常的にこの問題を周囲の人と話す

そもそも、環境「問題」というネガティブなイメージを前進的なものに変化させる。ワインーカフェのように、いろいろな場所で話し合う事をもっと普段のカフェでも実施し、閉ざされた場所ではなく、開けた場所で日常的にミーティングする。色々な人と共有した上で、会議にのぞむことができる。

あらゆる物のCO₂を可視化するデザイン

食品等あらゆる消費物に環境負荷の度合いを数値化して可視化するものをはるだけでも、違うのでは。自分の暮らしのCO₂を半分にすることを考え、実践する目安ができる。

オプション イベント



1

1 雪のナイトハイク
灯りのない夜の雪の森を歩き、自然を体験するハイキングツアー。

2

3

3 交流会
立食パーティ形式の交流会。

4

4 キャンドルナイト
冬至にちなみ、東京造形大学学生有志により卵の殻入りの廃油キャンドルが準備された。



組織委員会名簿

[組織委員長]

山本良一 [東京大学 生産技術研究所 教授]



[組織委員] (五十音順)

赤池 学 [ユニバーサルデザイン総合研究所 所長]
芦原太郎 [芦原太郎建築事務所 代表取締役]
井口 浩 [株式会社井口浩フィフス・ワールド・アーキテクツ 代表取締役]
池上俊郎 [京都市芸術大学美術学部 教授]
石田秀輝 [東北大大学院環境科学研究科 教授]
植松豊行 [松下電器産業株式会社 上席審議役 デザイン担当]
枝廣淳子 [有限会社イーズ 代表]
大島礼治 [株式会社オーシマデザイン設計 代表取締役]
加藤公敬 [富士通デザイン株式会社 代表取締役]
河北秀也 [東京芸術大学 教授]
川床 優 [ユニバーサルデザイン 編集長]
川原啓嗣 [名古屋学芸大学大学院 メディア造形研究科 教授]
黒崎輝男 [流石創造集団株式会社 代表取締役]
財満やえ子 [東京造形大学 教授]
佐藤博之 [グリーン購入ネットワーク 事務局長]
佐野 寛 [株式会社モス環境設計室 代表取締役]
白澤宏規 [東京造形大学 学長]
高橋幸矢 [名古屋造形芸術大学 学長]
竹本徳子 [株式会社カタログハウス 取締役 エコサービス室長]
中川邦彦 [東京造形大学 教授]
船曳鴻紅 [株式会社東京デザインセンター 代表取締役社長]
益田文和 [東京造形大学 教授]
宮脇伸歩 [株式会社INAX 総合技術研究所サステナブルデザイン研究室長]
宮城社太郎 [宮城デザイン事務所 代表]
山際康之 [東京造形大学 准教授、工学博士]
山村真一 [株式会社コボデザイン 代表取締役社長]
和爾祥隆 [創造学園大学 教授]



[実行委員長]

益田文和 [東京造形大学 教授]



参加者数115人

海外からの参加者：12人

参加国・地域：10 (シンガポール、タイ、ベトナム、アメリカ、
イスラ、インドネシア、中華人民共和国、大韓民国、香港、日本)



参加者名簿

凡例：** = 組織委員長、* = 組織委員、# = 実行委員長、* = 事務局スタッフ

Aaris Sherin	河東田 文	高北 幸矢 *	前田 雅信
秋谷 秀紀	川治 美紀 *	高田 友美	牧野 克己
秋本 梨恵	川原 啓嗣 *	高橋 亜紀	牧野 ゆきの
浅井 治彦	川部 優子	竹原 裕	益田 文和 *
天野 祐	河村 政司 *	Tanatta koshihadej	松村 要二 (通訳)
池之上 智子	川本 誓文	丹 聰子	松田 大輔
石田 秀輝 *	久保 雅義	茶山 真紀	松田 宗紀
石原 紀子 *	熊切 剛 *	津田 和俊 *	真野 一則
井関 千尋	黒崎 輝男 *	Tri Kartono	水口 美和
井藤 隆志	桑原 正和	戸塚 純子	三又 健司
伊藤 大毅	小林 可奈	泊 誠一	宮脇 伸歩 *
井上 肇介	近藤 崇司 *	外山 貴彦	村越 彩
Wu Wei-Cheng	是澤 菜子 *	中川 謙美	村越 豊
Wei Li	坂本 啓悟	永木 康人	森 哲郎
植松 豊行 *	芦藤 美貴	中岸 裕子	森 玲
宇田 俊彦	佐藤 純香	中村 勇貴	矢代 圭佑
海田 奈々	酒井 良治	中村 和宏	柳沢 大樹 (通訳)
梅原 高秋 *	島崎 晴佳	奈須 愛也香	山口 琴子
Ernst-Jan van Hattum	島津 洋平	西村 澄夫	山本 和秀
大島 誠	品川 誠	布垣 直昭	山本 良一 *
大山 寛子	白岩 祥子	服部 篤子	Lei-Mei Julia Chiu
岡本 容子 (通訳)	Sirintra Aursirisub	比内 萌春	LIANG XIUCHUAN
小川 武	Singgih S Kartono	兵藤 茉衣	梁 伯源
押川 幸子	進藤 加代 *	平井 宏満	林 茵茵
押見 佳織	鈴木 勝美 *	広川 由美	渡邊 敏之
小野 真理香	鈴木 誠一郎	藤森 貴也	渡辺 美貴
小幡 友夏	鈴木 美絵 *	藤原 好宏	渡辺 唯
加藤 公敬 *	瀬川 晃	本田 圭吾	和爾 祥隆 *
加藤 健太	関 雄作	本間 日呂志 (写真撮影)	





www.ecodesigninstitute.com

「第3回サステナブルデザイン国際会議 Destination2008-2024」について
は、2008年12月に開催予定です。ホームページにて随時お知らせいたします。

第2回サステナブルデザイン国際会議報告書 (Ver.1.0)

サステナブルデザイン国際会議事務局

有限責任事業組合（LLP）エコデザイン研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-22-8

TEL : 03-6826-1511

EcoDesign Institute FAX : 03-3578-1459

E-mail : mail@ecodesigninstitute.com

URL : www.ecodesigninstitute.com

掲載写真（特に記載のないもの以外全て）

撮影：本間 日呂志

© 2008年 サステナブルデザイン国際会議実行委員会

本報告書の全部または一部の複写・複製・転訳載を禁じます。これらの
許諾についてはサステナブルデザイン国際会議事務局までご照会ください。